

## 坂研究とエビデンス

—近代の学問としての坂研究を、エビデンス・史料批判との関連で見直す—

### 1. 近代の学問、それは科学という形態をとっている

エビデンスは、最近のビジネスの場ではよく使われるキーワードとなっています。ビジネスが適正に行われているかを判断する際の根拠、それがエビデンスです。法律に沿った規則が作成されているか、指示通達として社員に行き渡らせているかなど規則、指示通達のように文書化されたものを指します。また、取引での争いに際し、言った言わないではなく、契約書、あるいは見積書の受領印、会議、打合せでの議事録が、そうした争いにおいて、自分の主張の正しさを示す根拠、エビデンスとなります。エビデンスの重要性が言われるようになり、一般のビジネスマンもエビデンスという単語を普通に使うようになっていきます。

しかし、今回お話するエビデンスはそれではありません。ビジネスの用語としてのエビデンスのベースとなった学問用語、研究の用語としてのエビデンスです。

西欧で生まれ、体系化された近代の学問は、そもそもの基本は自然科学からスタートしています。近代の学問は科学という形態をとっている訳です。科学は自然科学を基本にエビデンスを重要なものとしています。人文科学、社会科学も、ともに近代の学問としての体系を形成するに際し、自然科学を参考にエビデンスを重要なものと位置付けています。

自然科学は、自然のさまざまな現象を体系化、法則化し、予想可能にします。しかし、その法則化は次の事象が予想通りに起こってはじめて立証出来るのでは占いと変わりありません。その法則化を説明するために、厳密な条件のもとで行われる実験とその結果が、その法則化の根拠、エビデンスとなります。ここで根拠として重要なのが、実験の方法に恣意性がないかということであり、また、実験結果が実験対象者の特殊性により影響を受けないレベルに対象数が採られているということがあります。さらには、実験を行う研究者が異なっても、同じ条件で実験を行えば、同一の結果を得られることも根拠、エビデンスとして重視されます。

自然科学の方法を取り入れ、人間の活動やその結果、社会や国家などの動きを研究する人文科学、社会科学も科学である以上、研究成果を証明するものとしての根拠、エビデンスを不可欠としています。但し、自然科学と異なるのは、人間とその活動、人間の集団を研究対象とする場合、個体による個別性の多さなど変数が膨大となります。社会科学などで法則化を目指す時、条件を大きく制限することがあります。経済学などを考えるとそのことが理解出来ると思います。

人文科学、社会科学の分野の学問では、法則化を一方に視野におきながらも、基礎的な部分を構築する研究があり、そこでも根拠、エビデンスが求められています。歴史学という学問があります。過去の出来事を研究する学問です。その時、何が起きたのかということをも問うものです。何が起きたのかを明らかにするために歴史学が重要としているのは、過去の文献に記録されたことです。歴史学というのは、基本的に文献学な訳です。歴史学の研究に用いられる過去の文献を史料と呼びます。文献学としての歴史学においては、この史料が根拠、エビデンスの第一となります。根拠である以上、史料の信頼性が重要となります。信頼性を確認する方法としては、同じ事柄を書き記した過去の文献を複数比較し、その内容の異同を検討し、史料としての信頼に足るかどうか、価値付けていくものがあります。また、記載された事柄が起こった時と、そのことを記述した過去の文献の時間的距離から信頼性をはかるという方法もあります。ある事件が起きてから100年とか150年後に記録された文献の信頼性は、10年後くらいの同時代に書かれたものよりも低いと見なされる傾向があります。また、判決文や商売での売買の記録などは、対象が極めて限定的ですが、誤った内容を記載する可能性が極めて低いことから、史料としての信頼性は高いと考えられます。このように、史料の信頼性という観点から、それぞれの史料の価値、根拠となりうるかの検討は、厳密に行われています。この史料の信頼性の検討、それは史料批判と呼ばれ、歴史学が近代の学問としてその成果を示す重要なものとなっています。

坂学、坂の研究は近代の学問として、研究対象を明確にし、研究の方法を確立した上で、その成果を示すに際して、どのようなものをエビデンスとして提示出来ているのかを坂研究の歴史を振り返りながら、確認して行きたいと思います。その際、歴史学に見られるような史料批判、エビデンスを厳しくチェックしているかという点も見て行きたいと思います。

## 2. 坂を、初めて近代の学問（＝科学）の対象とした人物、日本民俗学の祖、柳田国男

明治になり、西欧から多くのものが入って来て、学問の世界も自然科学を代表に近代の学問が導入されました。その中で、坂を学問の対象とする試みはあったのでしょうか？

坂を、近代の学問の対象として研究を行った最初の人物は、日本における民俗学の創始者である柳田国男であったと思います。明治のすべての学問領域について調べた訳ではないので、断言は出来ないのですが、多分、間違いないかと思います。近代の学問の対象として坂を取り上げるということは、坂について何を研究するの

か、その際、どういう方法で行うのか、研究で成果をなすためにどのようなものが根拠、エビデンスとなるのか、これらが揃わなければならないのですが、柳田国男はそれらが揃った研究を行っています。

柳田国男を、坂の何を研究対象としたのでしょうか。坂の名前なのです。「地名の研究」において、地名を研究の対象としていますが、坂名をその地名のひとつとして取り上げた訳です。

#### <柳田国男の問題意識>

柳田国男の問題意識を、以下に箇条書きで記し、その後で説明を加えます。

- ・ 日本は、狭い国土なのに、地名の数がものすごく多い。ある基準で数えると約2000万。もしかすると約1億の地名があると想定される。
- ・ その数多い地名には、地名の意味、謂れが不明なものがとても多い。
- ・ しかし、地名は人間が付けたものであり、地名を付ける必要があったから付けられたことから、人間と自然の関わり、それも文字をもたない時代以来の関わりを探る手掛かりとなると考えられる。

ここで、柳田国男が言う地名の数を聞くと、驚かれると思います。柳田国男が取り上げた地名は「地名の研究」が出版された昭和11年頃の市町村、その下の「大字」（これは、明治初年度の町村）、その大字を区分した「字」、さらには、明治期にそれ以前の「字」をいくつか統合して、柳田国男がここで言う「字」にしたので、統合される前のもっと小さい単位である「字」があり、その小さい字を「分割して小字と呼んでいた地方も多いが、その字なり小字なりの下に、なお二三筆の田や畠を一括してそれぞれの名があった。今では所有者とその近親のみが知っている地名である。これを古くからミョウシヨ（名処）といていた。」というレベルのものまでも取り上げるので、ものすごい数になる訳です。しかし、名処について「土地に番号というもののなかった時代には、売買にも譲渡にも四至と土地の種目と、名処とをもって目的物を指示するの他はなかった。」「飛び飛びに耕地を持つ農家には、今でも決して無用でない。」と地名として機能していたことを説明し、従って、地名の研究対象としてここまでを取り上げるとしています。

#### <柳田国男の地名研究の方法論>

次に柳田国男の地名研究の方法論を箇条書きで記します。最後に膨大な量となる地名をどのように蒐集したのか、研究対象であるそれぞれの地名が存在することの根拠、エビデンスとして何を用いたのかを説明します。

- ・ 地名は漢字で表記されるものが多いが、漢字は地名が付けられた時点よりも、はるか後の時代に漢字を当てられた可能性が高く、宛て字等が想像されるので、

あくまでも「音」にこだわるべき。

- ・ 地名の意味、謂れとして、中世や近世の文書に書かれた話などは、こじつけ、伝説、又聞き等、根拠が不確かなものが多いので、これは参考にはならないと考えるべき。
- ・ 地名の意味、謂れを知るためには、どういう地形・場所にあるかを丁寧に調べる必要がある。
- ・ 地名の意味、謂れを知るためには、それぞれの地形・場所を調べるのに加えて、日本全国で同じ、ないしは同じような地名をリストアップし、それぞれの地形・場所を比較検討する。
- ・ 地名の意味、謂れを知るためには、上記2点を詳細、丁寧に調べた上で、古語等で類似の言葉がないかを検証し、上記2点の検討と矛盾がない場合、その古語は、その地名の意味、謂れの仮設になり得る。

柳田国男が、地名蒐集に用いたものとしては、先ず、地図があります。陸地測量部の二万分一地形図をあげ、ない地域については、五万分一地形図によるしかないとしています。次に、官報などをあげています。これは、保安林の編入、解除の告示を確認し、そこには大字、番地の間に字、小字まで書かれているからとしています。この他、1875、6年頃、地租改正に当たり、地名の統廃合を行うこととなり、廃止される地名を記録することを内務省地理局が進め、全国の郡、村に命じた大事業となり、各郡村誌という数百巻にも達するものが完成したものの、内務省はもとより大学の研究者などでも利用する者がほとんどなく、放置されていたものがあつたのを柳田国男は農商務省の課長という立場を利用し、借り出し、17府県分を目を通したと言っています。この膨大な資料は、東京大学で保管されていた際、関東大震災ですべて灰塵に帰しています。

<「地名の研究」で坂名を取り上げ方、取り上げた例>

では、「地名の研究」で坂名をどういう風に取り上げているのか、また、取り上げた例としてどういうものがあるかは以下の通りです。

アイヌ語で「沼、沼地」を意味する「トマム、またはトマン」に関連した地名として、「ドウマン谷」「堂満」「道満前」「東満塚」とともに「堂満坂」（相模愛甲郡依知村大字下依知字堂満坂）をあげています。依知村は、現在の厚木市の一部ですが、神奈川県の詳細地図（昭文社「街の達人 全神奈川県」2017年2月版）では、堂満坂を認めることが出来ません。但し、この漢字、若干の音・読みの違いも含め、似たような名称を比較するという方法については、横関英一の項に関連するので、記憶しておいて下さい。

また、「カクマ」という地名に関連して、福井県の「角野前坂」「朝日前坂」という地名をあげています。このふたつの地名は、集落名と言っていますが、同時に、川を挟んで東西に向き合っている集落とし、しかも、その位置は岐阜県との県境に近い山間部であり、このふたつの集落は斜面に位置していることは明らかであり、ふたつの集落名は、そこにあった坂に由来すると考えられます。

堂満坂、角野前坂、朝日前坂は地名であることは確かですが、坂名であるかどうかまでは、柳田国男の記述からは分かりません。しかし、「地名考察」と題するもので、48の地名を論じた中で、坂そのものを取り上げた例があります。それは、東京都大田区の大森駅前の「八景坂」です。

この名前について、柳田国男は、この地は風光明媚にして八つの景を賞でるといような場所ではなく、八景は後代に当てた文字に過ぎないと述べています。そもそも、柳田国男は、八景などというものは、近世の文人が暇にあかして、付けたもので、遊びの類いに過ぎず、その土地に住む者とは縁のないものとして、地名研究の対象にならないと切り捨てています。

では、柳田国男は「八景坂」の名前の謂れは何かと言っているのかと言えば、「ハケ」あるいは「ハッケ」がもとだろうと述べています。「ハケ」は、私たちに、国分寺崖線とともに親しい、あの「ハケ」です。「ハケ」もしくは「ハッケ」は、「東国一般に岡の端の部分を表示する普通名詞」と説明し、小金井、調布、谷保、田端、岩淵などの「ハケ」に関連する地名をあげています。

「八景坂」の名前の謂れを「ハケ」もしくは「ハッケ」にあるとした「八景坂」の考察の最後で柳田国男は、以下のように述べています。「八景坂」の別名として「ヤゲン坂」をあげ、「ヤゲン坂」は「八景坂」をヤケイ坂と読んでの誤りという説に対しては、これは当て字をもとにした議論に過ぎないとしています。「ヤゲン坂」は「薬研坂」のことであり、「薬研坂」は、「久保を利用した緩傾斜の坂であったゆえに、両側が高かったからの命名」であった筈として、ここでも、漢字の八景坂という名を否定しています。

(この項は、後述する横関英一の議論に関連します)

<柳田国男以降、民俗学の分野では、地名研究は大きな流れにはなっていない>

柳田国男が「地名の研究」で、地名研究の方法やその研究結果を数多く、詳細に示したにも関わらず、柳田国男以降の民俗学においては、地名研究は千葉徳爾「新・地名の研究」など、いくつかの成果を除けば、そう大きな流れとはなっていません。

筑波大学の民俗学の教授であるとともに、日本民俗学会会長をつとめた宮田登は、その意味でアカデミズムの民俗学者の代表ともいうべき存在でした。その彼が放送大学教材として出版した「民俗学」は、民俗学の基本的な教科書であります。民俗学の主要な概念、研究対象として列挙したものは、「常民」、「ハレとケ」、「ムラとイエ」、「稲作と畑作」、「山民と海民」、「交際と贈答」、「盆と正月」、「カミとヒト」、「妖怪と幽霊」、長老制やうばすて伝説に関連して「老人の文化」、家の祭りや子供の行事との関連での「女性と子供」などで、地名は出て来ません。「ムラとイエ」は関連がありそうですが、ムラの成り立ちや特徴を主な論点として説明しています。

大きな流れとならなかった理由としては、いくつかの理由が考えられますが、一番大きな理由としては、複数の要因から地名研究では大きな成果が出しにくいということに尽きると思います。（「日本の地名」という著作がある在野の民俗学研究者である筒井功も、その著作の中でそのように感想を述べています。また、同名の「日本の地名」という著作のある鏡味完二も、柳田国男の手紙から「日本の地名は苦労の多い割に得るところが少ない」と考えていたのではと推測しています。）

もうひとつの大きな理由としては、地名を研究対象とするのは民俗学に限ったものではなく、歴史学、地理学など隣接する学問の方法でも行うことが可能であったことも、柳田国男以降の民俗学で地名研究が主たる研究分野にならなかった理由とも考えられます。参考文献にあげた地名に関する本の著者の中で、服部英雄は九州大学の歴史学の教授で、歴史学によるアプローチで地名の研究を多く行っています。また、鏡味完二は名古屋の高校の教諭をしながら、地名の研究を続けましたが、その主たる方法は地理学によるものでした。

### 3. 柳田国男以降、学問の対象として取り上げられて来なかった坂を学問の対象として取り上げたふたりの人物。その第一が坂学の祖ともいうべき横関英一

横関英一は、坂研究を近代の学問として確立しようという明確な目的意識があったと思われま。それは、研究対象を明確にし、エビデンスを重視、研究方法を論理的に説明可能にするというところに、その問題意識がはっきり出ていると思います。

横関英一は、研究対象を名前のある坂に限定し、過去において名前のある坂の存在とその道筋を確認し、現在のある坂と比較することで、その坂の歴史性を評価しています。さらに、名前のある坂に関し同じ名前の坂を比較し、それぞれの道筋、坂の形態・形状などから名前の謂れを探っています。その研究のエビデンスとして

何を重視したのかということ、過去のある時代において、その名前が付いた坂が存在していたということに着目し、それを確認する手段としてその時代に書かれた書籍とともに地図を重要な根拠としています。

横関英一の「江戸の坂 東京の坂」は、江戸の坂、東京の坂について書かれたひとまとまりの本ではなく、坂についての論文をまとめた論文集です。その中で、横関が行おうとしら研究の対象、方法についてのみ書かれた論文はありません。個々の論文を読み込み、横関が採った研究の対象、方法を探っていくしかありません。そこで読み間違える危険性があります。「江戸の坂 東京の坂」には「江戸東京坂名集録」という言うなれば、坂リストというものが収録されています。そこには、東京 23 区周辺部の坂、例えば、品川区や目黒区、北区、板橋区の坂なども含まれています。さらには、京都や木曾街道など東京以外の坂もあります。論文の中でも同様のことがあります。しかし、注意して見ると、横関が主に論じているのは、江戸時代の江戸市中というべき朱引内の坂についてであり、それ以外の坂は、同じような坂名である等、朱引内の坂を考察する際の参考という位置付けであるのが分ります。

さらに、横関は坂名の由来を検討する際、同じ名前の坂を見比べ、それぞれがどのような地形、形状なのかを比較し共通点を探っています。これらは、まさに柳田国男が「地名の研究」で採用した方法論でもあります。柳田国男の方法論と同じでありながら、横関は柳田国男よりも有利な立場に立っていました。柳田国男が日本中の膨大な地名を取り扱う方法論の構築に悪戦苦闘しなければならなかったのに対し、横関は、江戸時代の江戸市中・朱引内の坂を主たる研究対象に絞ることで、江戸時代にその坂が存在したこと、その坂名で呼ばれていたことを、各種の江戸切絵図というもので楽々と証明することが出来たからです。江戸切絵図は、手書きの地図とは異なり、木版印刷により多部数印刷され、多くの人間の目に触れることで、容易に間違いを指摘される環境にありました。さらには、商品である江戸切絵図は、同じ版元から改訂版が売り出されただけでなく、複数の版元からも出されています。読者の目というものを通じて誤りは、常に指摘され、改訂版、他の版元版などを通じて、誤りは修正される環境にあったため、切絵図全体を比較検討することで、史料としての信頼性の高さは担保されています。切絵図全体が、横関の研究方法ではエビデンス足り得ている訳です。

横関英一が柳田国男の「地名の研究」を読み、その坂研究の指針としたかどうかは何も語られていないので分かりません。しかも、横関英一は「江戸の坂 東京の坂」として、自らの坂研究の成果である数々の論文をまとめ上げ、坂研究が近代的な学

問として成り立つことを示そうとしていると読める中で、一点、大きな疑問があります。それは、近代的な学問による研究書であるならば不可欠な参考文献一覧がないことです。参考文献一覧に「地名の研究」があるかどうかを確認するということが出来ません。ここから先は想像の話になり、これまで語って来た近代的な学問の方法とは縁遠くなりますが、横関英一は敢えて、参考文献一覧を省いたのではないか、故意に削除したのではないかと思えて仕方がありません。柳田国男をはじめ、先人の研究方法、研究成果を参考に、坂研究を近代的な学問として世間に認知させようとする時、例えば、柳田国男の坂についての説に異を唱える（異を唱えないまでも、そのままの形では継承しない）としたら、柳田国男の地名学の提唱には乗らなかったものの、柳田国男の唱えた民俗学の後継者として世に立っている民俗学者により、柳田学説を非難するものとして論難され、世間の認知を得ようとしている坂研究の学問的な価値というものに致命的な傷がつくことを避けようとしたのではないか、そのため、敢えて参考文献一覧を省いたのではないかと考えるのは穿ち過ぎかもしれません。

しかし、横関の坂研究の方法の主要な部分が、あまりにも柳田国男の「地名の研究」に重なり過ぎるだけに、横関が「地名の研究」を読んでいないとは考えにくいのです。

横関英一の坂研究と柳田国男の関係ということで一番検討しなければならないのは、柳田国男が唯一、具体的に坂について論じた大森山王の八景坂についての横関の説です。「江戸の坂 東京の坂」の坂リストとも言うべき「江戸東京坂名集録」の中で「八景坂（はっけいざか）大田区大森駅前を北から南へ下る坂。昔は駅前の岡（今は天祖神社境内）へ上がる坂であった。薬研坂、やけい坂とも」と説明しています。そして、「江戸の坂 東京の坂」所収の論文「坂名の変化転嫁」の中では、「大森の八景坂（大森駅前から天祖神社のほうへ上がった昔の坂みち）もこれと同じで、初めは「やげんざか（薬研坂）と言ったのであるが、それが「やけいざか」と写し誤り、八景（やけい）の字が当てられ、やがては景気よく八景坂（はっけいざか）とまで発展してしまったのである。」と語っています。

八景坂についての横関の説には、重要なふたつのポイントがあります。

- (1) 坂名の由来の第一として、柳田国男の主要な説である「ハケ」「ハッケ」語源説は一切取り上げず、柳田が「ハケ」「ハッケ」とは別に地形から付けられた別名と考えた「やげんざか」を坂名の由来としていることです。
- (2) 八景坂本来の道筋は、大森駅前を南北に下る現在の八景坂の道筋ではなく、駅前にある天祖神社の岡に上る坂としたことです。



このふたつは、横関が明確に述べている2点ですが、それぞれ疑問があります。何故、今の八景坂の道筋ではなく、天祖神社の岡に上る道筋を、本来の八景坂の道筋であると断言出来たのでしょうか。また、やげん坂を坂名の由来とすれば、やげんざか～やけいざか～八景坂（やけいざか）～八景坂（はっけいざか）と、平仮名での写し間違いから漢字に変換、その漢字の読み方の変化となり、坂名の転嫁の道筋が自然であることは確かです。

しかし、薬研坂という坂名について横関は、赤坂の薬研坂の説明で以下のように書いています。「赤坂の薬研谷のところの二つの坂を、薬研坂と呼んだのは、実にくまいものだと思う。一つの名称が、二つの坂に利用されたのである。（略）とにかく、薬研ということばがおもしろい。かた一方の坂だけでは薬研にはならない。どうしても、二つの坂がいっしょにならなければ、薬研坂にならないところに味がある。」

大森の坂の由来が「やげんざか」「薬研坂」であるならば、坂はふたつなければならない筈です。横関英一の八景坂の説明にはないものの、大森駅前の天祖神社の岡に上がる坂ともうひとつ、対になる坂を想定していたことが考えられます。現在、八景坂と呼ばれている大森駅前を南北に下る坂と、この坂ふたつが対でやげん坂と呼ばれていたが、やげん坂がやけい坂、八景坂と言われるようになる中で、現在の八景坂のみがその名で呼ばれるようになったとすると薬研坂ならば、坂がふたつなければならないということには矛盾しません。しかし、横関の説明を読む限り、こういう風には読めない文脈になっています。

横関の自信に充ちた説明の口ぶりから、大森駅前の天祖神社にあがる坂に「やげんざか」と書かれた手書きの古地図を、横関英一は見ているという想像が出来ます。その古地図には、やげんざかでありながら、その坂にのみやげんざかと記されていたので、その古地図を根拠とする以上、別な坂をもうひとつのやげんざかと言うことは出来ない、としたのだとすれば、ひとつの坂のみを薬研坂と呼ぶことを横関が仕方がないとしたことの説明も付きます。その古地図の存在を示せていないので、エビデンスがない想像でしかないですが、横関の説明の仕方、薬研坂という名前の矛盾等を説明する上で、一番合理的ではないかと思えます。

横関英一は「江戸の坂 東京の坂」だけではなく、坂研究の論文集を他に出し、坂研究をもっと深めて行こうと思っていたのではないかと思えます。そこには、研究書に相応しく、参考文献一覧も掲載され、「江戸の坂 東京の坂」で散見された疑問もなくなっていたのではないかと想像出来ます。しかし、「江戸の坂 東京の坂」

続編を出版した後、横関に寿命が1年しか残っていなかったことは、坂研究の歴史の可能性を考えると、残念なことだったと思います。

しかし、そうではあっても、横関英一「江戸の坂 東京の坂」が出た時、東京を理解する新しい視点を提供するものとして大きなインパクトを与えたと想像出来ます。そのことを示す大きな例が野口富士男「私のなかの東京」です。

山の手生まれ、山の手育ちの作家、評論家である野口富士男は、本人の記憶と小説やエッセイに描かれた戦前の東京の姿を「私のなかの東京」として書き記しています。東京論ブームが来る前に出た東京論の成果です。野口富士男は、この本で東京を描く際、戦前の東京と言えはよく登場する浅草や銀座、吉原、上野などは当然として入っていますが、山の手出身者らしく、神楽坂、早稲田、市谷、四谷、飯倉、芝、芝浦など、坂の多いエリアを紹介します。野口富士男自身の記憶として坂は印象深かったのですが、横関英一、石川悌二により東京の坂についての掘下げた研究が示されたことにより、山の手を重要なモチーフとする意識付けが出来たのだと思います。こういう形で、横関英一が提唱した江戸、東京の坂研究、坂学は、江戸ブーム、東京論の流れにも組み込まれて広がっていったのだと思います。

#### 4. 横関英一とともに坂学確立に貢献した石川悌二の問題点

横関英一が「江戸の坂 東京の坂」で坂学を確立しようとした同じ時期に、坂学確立に向けて貢献した人物に石川悌二がいます。

石川悌二は、横関英一が主たる対象を江戸の朱引内の坂に限定したのに対し、東京23区から、さらには、武蔵野・多摩地区の坂にまで広げ、東京都に存在する名のある坂を出来るだけ多く蒐集しようとしています。そして、その成果を、東京の坂道事典という形式でまとめています。横関英一よりも、エリア、時代ともに研究対象としての坂の範囲を大きく広げていますが、それらの坂がいつから存在するのか、何により、坂名がそう呼ばれているのかを確認したのか、エビデンス・史料は何に拠っているのでしょうか？江戸以来の坂であるものの、朱引外の坂については「江戸名所図会」等の書籍、さらには、近代以降に拓かれた坂については「大日本名所図会」や戦前のものを含む区史、市史等の近代の書籍を根拠としています。

しかし、「東京の坂道」に掲載されているすべての坂について、根拠がこうした書籍等で示されている訳ではありません。むしろ、根拠となる書籍が示されていない項目の方が多いと言えます。寺社などの名を冠した坂名などの項で江戸時代の書籍を引き、その寺社が江戸時代にすでにその場所に存在したことを説明している例がいくつもありますが、その寺社が江戸時代にそこに存在していたことを示してい

るに過ぎず、その坂がその寺社の名前をつけて呼ばれていたことの証明にはなっていません。こういうものも含むと、「東京の坂道」に掲載されている坂は、その名前の由来を問う以前に、その坂名で広く認識されていたものであったのかどうかを示す根拠なく語られたものが多数含まれ、坂道研究のベースとしての東京の坂道事典として、はなはだ、危ういものであることが分ります。これは横関英一と比較した時、研究対象を明確にし、研究方法を近代の学問に耐え得るようにするという意思が弱かったことをあらわしていると思います。

横関英一に対し、多くの書籍を調べ上げることで、研究対象の坂の範囲をもっと広げられるという自負があったのかもしれませんが。その自負から東京の坂道事典をひとりでまとめ上げるということは、ある種、無謀な試みであった面は否定出来ないと思います。

その無謀さの例をひとつ、あげます。谷中に「赤字坂」という近代の坂があります。石川の説明の一部を示すと、「(前略) 派出所の上から坂頂まで西側崖上一帯の広大な地域が、明治末から昭和の初めにかけて相場師の渡辺治右衛門の屋敷であった。彼は明治元年に美濃国海津郡高須町の吉田耕平の二男に生まれて勝太郎と称していたが、大垣の素封家渡辺治右衛門の養子になり、養父の歿後はその家産と名前を継ぎ、高須銀行、大垣共立銀行、第七十六銀行などの役員として地方金融界に貢献した。明治四十一年それらをすべて辞して、東京に進出し株式仲買店をひらいて巨富を得たが、昭和二年の財界恐慌によって破産し、浅草精光寺に奇遇して同五年にさびしく歿した。赤字坂の名は、渡辺治右衛門が破産したころにつけられた町の人々の皮肉な呼び名である。」となりますが、実は、この説明のほとんどが誤り、間違い、不備なのです。

誤り、間違いを指摘しますが、先ず第一に言うべきことは、昭和2年に起こったのは、財界恐慌ではなく、金融恐慌です。日本近代史の概説書程度のものを読みさえすれば、金融恐慌という歴史的事件の正しい名前を知るのは容易です。石川悌二が執筆した当時でさえもそうであったと断言出来ます。1960年代半ばに刊行された中央公論社の日本史の概説書シリーズ「日本の歴史」(全26巻)シリーズは大ベストセラーとなり、日本史ブームを巻き起こしました。その第24巻に金融恐慌についての詳しい説明があります。概説書程度に書かれている事すら確認せずに誤りを記している訳です。

金融恐慌の直接の引き金として有名な話は、中小銀行の経営状況への不安感が広がっている中、時の大蔵大臣が事務方からのメモを読み違えて、渡辺銀行が休業の止むなきに至ったと発言したことから取り付け騒ぎがおき、実際に渡辺銀行は破産

に追い込まれています。渡辺治右衛門は、その渡辺銀行（正式には、東京渡辺銀行）の頭取であった人物であり、相場師などではありません。金融恐慌を含む時代についての研究書で、石川が読むことが可能であったものに、経済学者の中村隆英の「昭和恐慌と経済政策」があります。その中で、渡辺銀行、渡辺一族について「不良期企業の代表的な事例は渡辺銀行である。渡辺一族は、東京市内の大地主で自ら銀行を経営し、また各種会社の大株主となって実業界に進出していたが、不況と震災のため銀行資金がこげつくと、関係会社の資金や信用を動員したり、銀行の金繰りに回してきた。」と説明しています。

渡辺治右衛門は、江戸時代を通じて明石屋という名で海産物問屋として財をなした家系であり、ここに出て来る渡辺治右衛門の父親、9代目渡辺治右衛門（1848年～1909年）は、明治期に多くの企業の設立に関わり、東京に多くの土地を持ち（没する少し前の平民新聞の記事によると東京府で第五位の土地持・地主でした）、貴族院議員にもなっています。二十七国立銀行の頭取も務めていました。

ここに出て来る渡辺治右衛門は、9代目渡辺治右衛門の次男として1872年（明治4年）に生まれ、幼名は源次郎。1909年に父親が亡くなり、家督を継ぎ10代渡辺治右衛門になっています。頭取をしていた二十七銀行を東京渡辺銀行に改めています。岐阜の高須の生まれでもなく、先代の渡辺治右衛門は養父などではなく実父です。幼名も勝太郎などではありません。岐阜の地方金融機関などと関係あるはずもありません。石川が出典を示していないので、どこからこんなデタラメな話が出て来たのか不明です。石川は、根拠が不確かな本・論文に書かれていたものを、他の一般的な概説書等で検証することもせず、そのまま鵜呑みにして記載したのだと想像出来ます。研究の誤りはいいのですが、次の世代の研究者がその誤りを正すためには、出典が示されていれば、その出典の史料批判を行うことで容易に正せます。石川は、出典を示さないことで、自身の研究の誤りを残しただけではなく、その原因を探る糸口を残さないということで、学問研究の上で二重の問題を残しました。

渡辺治右衛門の経歴についての誤りが、実は、赤字坂という坂名の由来についての大きな間違いを生んでいます。渡辺治右衛門は、江戸時代には明石屋という大店をやっていたことから、明石屋の治右衛門ということから、あかぢ屋・明治屋と呼ばれていました。つまり、あかぢというのは、渡辺治右衛門を指す通称だった訳です。あかぢ屋・明治屋の屋敷がある高台だからあかぢ山、その屋敷の前の坂だからあさぢ坂だった訳です。そして、そのあかぢ屋が破産したから、庶民はあかぢ屋が破産したことを皮肉った訳です。倒産、破産から、唐突に赤字坂の名前が出て来た

訳ではありません。もともと、あかぢ屋という呼ばれ方があったから生まれた皮肉です。その大元を見過ごすことで、赤字坂という坂名の由来が曖昧なままになった訳です。

赤字坂について蛇足になりますが、石川悌二の誤りに、森鷗外の後妻である森しげについてのものがあります。赤字坂の項の最後で、森鷗外の後妻が渡辺治右衛門の妻であった女性であるとし、明治36年の報知新聞の記事を引き、その女性は渡辺治右衛門の息子、勝太郎の妻であったが離縁したものを森鷗外と結婚した記載を下に、破産、赤字坂の謂れのもととなった渡辺治右衛門の妻であったとしています。10代渡辺治右衛門は、幼名は勝太郎ではないので、10代渡辺治右衛門の妻であったとするのは間違いです。9代渡辺治右衛門の息子に勝太郎という者もいません。三男に勝三郎という者があり、東京瓦斯社長をしたりしていました。雑誌「谷中・千駄木・根津」の編集長を務めた作家の森まゆみは、他の多くの情報を鑑み、森鷗外の後妻の先夫を、この勝三郎であると見ています。また、石川が引用した報知新聞の記事の中に「彼の有名なる明治屋事渡辺治右衛門」という記述があり、明治屋＝あかぢ屋が出て来ているのですが、石川はこの記述のヒントに気が付かないまま、先のような誤り、間違いだらけの記載を行ってしまっています。

石川悌二の赤字坂の記述を、日本近代史、日本経済史、日本近代文学史の研究者たちが読めば、その誤りと水準の低さから坂研究の学問としての未熟さを笑われるのではないかと残念に思います。

##### 5. 横関英一、石川悌二の後継者である岡崎清記、道家剛三郎などにみるエビデンスの軽視

横関英一、石川悌二以降の坂研究の歴史において、大きな著作を残した人物として岡崎清記、道家剛三郎のふたりがいます。ともに、横関英一の影響とともに、石川悌二の方法に影響を受けていると言えます。ひとつは、石川悌二同様に、対象を東京23区から武蔵野・多摩地区まで広げていることがあり、ふたつ目としては、その結果を、石川悌二と同じく、東京の坂道事典という形式でまとめようとしたことです。このふたりの著作では、石川悌二にすでに見られた近代の学問、研究として見た場合の甘さがより目立っています。

このふたりの問題点については、時間の問題もあるのでさほど詳細には説明しませんが、横関英一が江戸切絵図等のエビデンスに基づき、その坂が江戸時代にすでに存在し、広くその名前でも知られていたことを示した上で、坂名の由来等の考察に入っているのに対し、それ以外のエリアの坂がいつから存在していたのか、その坂

名は広く認められているものなのか、それらを示す根拠は何なのか、その根拠史料・資料はどの程度、信頼性があるものなのか、これらが曖昧なままの記述がいくつも目に付きます。その例を数え上げるとキリがないので、岡崎、道家それぞれについて、2点ずつ、例を上げます。

東京都北区田端の坂の中で、幽霊坂は、横関英一は無論のこと、石川悌二も取り上げていません。岡崎清記がはじめて取り上げた坂です。その幽霊坂について、岡崎清記「今昔 東京の坂」の説明は以下の通りです。

「古い石垣の上に茂る樹と、寺の庫裏に囲まれた淋しい坂である。急勾配には見えないが、坂を上って来る人は自転車を降りて押している。人目につかぬ東京の美しい坂の一つといえる。幽霊坂の名前は、月並みにすぎる。」これが、幽霊坂に関する説明のすべてです。この坂を幽霊坂と呼ぶということは、どういう史料・資料を下にしているのか、何も示されていません。これでは、この坂を本当に幽霊坂と呼んでいいのか、評価することは出来ません。岡崎は、石川悌二と同じく、研究書として基本である詳細な参考文献一覧を巻末に付けています。その中に「北区史」「北区の史跡と文化財」をあげているので、そのどちらかに幽霊坂の記載があるのかもしれないが、先行のどのような研究をベースとしているのかを示す、エビデンスの提示を怠っていて、近代の学問の基本が守られていません。そもそも、岡崎は「今昔 東京の坂」の中で、50 を超す名前のない坂・無名坂について語っており、巻末の坂名索引でも無名坂について入れています。岡崎の意識の中に、東京の美しい坂を愛する者として、坂の魅力を伝えたいという思いがあり、坂研究の成果とともに、坂への愛情を語りたということが混在し、研究書であるとともに坂エッセイという性格のものになったのではないと考えられます。

また、横関英一、石川悌二が取り上げていない田端の坂で、岡崎が取り上げた坂に石坂があります。石坂について、岡崎はその道筋を示し、近くに陶芸家・板谷波山の工房があったことを述べ、坂名の由来は不明としています。しかし、この坂が石坂という名であるということの根拠、エビデンスは何も記していません。幽霊坂と一緒に。ところが、石坂の紹介の後半で、近藤富枝の「田端文士村」を引用します。

「東洋のマタハリといわれた川島芳子が、田端五〇〇番地の相磯という家にいたのは、大正の末ごろらしい。滝一小学校の石坂を下る左側だった。(略)」(近藤富枝『田端文士村』) 戦前、男装の麗人といって、騒がれていたことが、私の記憶にもある。」この記述の問題点を述べると、田端の坂として石坂、ポプラ坂の存在を、膨大な聞き取りを通じて掘り起こしたのは、ほぼ間違いなく近藤富枝であったこと

を何も語っていないことです。石坂、ポプラ坂、どちらの項でも近藤富枝からの引用を行っていますが、石坂、ポプラ坂発見の功績を何も語らず、田端文士村と呼ばれた時代に、このふたつの坂はあったということの傍証に使用しているに過ぎません。さらには、岡崎は巻末に詳細な参考文献一覧をあげているにも関わらず、そこにも近藤富枝「田端文士村」を載せていません。研究を公表する者の姿勢として、幽霊坂でエビデンスを示していないことよりも、もっと、問題がある態度と思われるます。

岡崎清記の著作が出たのは、横関英一、石川悌二の著作が発行された10年後でしかなく、坂研究の成果として参考にすべきものは横関、石川のものしかなかったのに対し、道家剛三郎の著書は、横関、石川の著書が出てから30年の歳月の後に出ています。ここでは取り上げませんが、複数の東京の坂についての研究があり、その成果を利用出来た点では、岡崎よりも有利な立場にありました。しかし、その分、先行する坂研究の成果を確認するのみで、その成果の基礎となるエビデンス、史料・資料に立ち返り確認するということが、なおざりになっている面が認められます。

岡崎清記が取り上げた田端の石坂についての道家剛三郎の紹介では、石坂の名前の由来は不明とし、「文献、先著にも何の考証もしていない」と述べ、神田明神の明神石坂が石段坂であったことを持ち出し、「ここも石段坂であったのではないかと想像するが、旧図をたどってもその確証はない」と独りよがりの意見を開陳しています。古い地図などの史料・エビデンスもないのに坂名の謂れを勝手に想像し、述べるというのは、近代的な学問のあり方ではありません。しかも、道家の著書が出版される前の1996年の段階で、関東大震災の頃、この坂は石だたみが敷かれていたことを古老などの聞き取りにより調べ、そのことを記した本がまとめられています。石坂の謂れは、その石だたみに拠ると考える方が説得力があり、少なくとも、道家の根拠ない説よりも学問的です。それを調べたのは北区の歴史について学んだ女性たちが、専門家である歴史研究者の指導の下、田端文士村にまつわる女性史を地道なヒアリング、古い史料の掘り起こしからまとめた「田端文士村・芸術家村と女たち」です。

また、石坂の紹介の最後で川島芳子について述べていますが、そこには近藤富枝の名前も著書も一切出て来ません。岡崎清記には、石坂というものは近藤富枝の大手出版社から刊行された本が広く知らしめたという認識はあったと思いますが、道家剛三郎にはその認識がまったくないことがよく分ります。

次に、石川悌二の項で誤りを指摘した谷中の赤字坂について道家剛三郎は、その

誤りをどう訂正しているのか、していないのかをみてみます。結論から言うと、石川悌二の誤りをすべて踏襲し、何ひとつ修正を加えていません。渡辺治右衛門を、石川の記載のまま、大垣の相場師としており、坂名の謂れとして「(渡辺治右衛門は) 昭和二年の財界恐慌によって破産、浅草の寺院に奇遇ののち窮死した。坂の名は彼が破産したころにつけられた庶民の皮肉でもあったようだ。別名がないのでそれ以前には無名であったと思われる。」と、石川悌二が渡辺治右衛門について明治屋(あかぢや)という呼ばれ方をしていた事を調べ損なったまま、坂名の謂れの大元を掴み損なったままです。さらには、森鷗外の後妻が渡辺治右衛門の妻であった女性という石川悌二の誤りをそのまま、堂々と開陳しています。これらから分ることは、赤字坂について、道家剛三郎は、石川悌二の記載をそのまま、コピー&ペースとして自分流の文章にしたに過ぎず、学問と言えない水準のものです。大学生のレポートとしても合格点はもらえない内容です。

このように、岡崎清記、道家剛三郎の著書には、坂についての研究姿勢、得に、エビデンスの軽視、先行する研究への批判的な眼差しの不足等が目立ちます。横関英一、石川悌二が取り上げていない坂で、このふたりが新しく取り上げたものについては、このふたりの著書にあるというだけでは、エビデンスとして不十分であると思います。坂学会の「全国坂のプロフィール」の中で取り上げた坂について、その根拠として岡崎、あるいは道家の著書があげられているものも少ないないですが、それぞれの坂について、岡崎、道家の著書の該当する項目を確認し、エビデンス足り得ているかを確認する必要があると思います。

## 6. 坂を学問の対象としたもうひとりの人物、それは日本中世史の巨星・石井進

石井進は東京大学の中世史の教授として、鎌倉時代の歴史研究においてアカデミズム・文献史学を代表する存在でした。しかし、鎌倉時代に関しては信頼に足る文献史料が少ないことから、文献史学のみでは研究が不十分になるという認識から、中世考古学の成果を研究に取り入れたり、網野善彦が切り拓いた民俗学的方法を歴史研究に組み込み、庶民や社会のあり方を探る日本のアナーカル学派的ともいうべき方法をも取り込み、日本中世史研究の分野を広げ深めました。

鎌倉時代の文献史料の不足の例としては、鎌倉時代のもっとも重要な文献といえる「吾妻鏡」は多くの欠巻があり、合計で約10年分について本文が現存していません。また、平安時代であれば文献史料として教養人である貴族、僧侶の日記を一次史料として扱うことも可能ですが、鎌倉時代では教養ある貴族、僧侶の多くは遠く京都やその近郊にいるため、鎌倉で起こったことについての記載は伝聞に基づく



ことが多く、史料価値が減じる結果となっています。

そのため、石井進は鎌倉時代に重要な出来事が起こった場所、建物などについて、それが具体的にどこなのか、どういう条件、環境だったのか（建物であれば、間口の広さ、奥行はどのくらいであったのか、他の建物との距離はどうなっていたのか、等々）、それらを知るために文献史料の記述を一方で参考にしながらも、中世考古学の発掘調査結果、さらには鎌倉を描いた絵図などを重要な史料として、研究を深めていきました。鎌倉の街は、街全体が史跡でもあり、道路の拡張工事、古い家を取り壊して、再開発でマンションの建築工事を行うなどに際して、ほぼ必ずといっていいほど、発掘調査が行われるため、鎌倉時代に限らず、古代から近代に至る歴史の足跡が発掘調査の結果報告書として残り、研究の蓄積が深まっています。とりわけ、鎌倉、室町時代という中世期の鎌倉についての考古学研究は大いに蓄積されていて、石井進はそれを活用することが出来た訳です。

鎌倉時代に重要な出来事が起こった場として、石井進が坂・切通しに注目したのは、考古学の成果を踏まえてのことだと思えます。そして、石井進は、さらに一步踏み込み、鎌倉の坂・切通しの機能、役割、どのような意味を持つものであったのかの考察に進み、そもそも、坂の役割、機能とは何なのかを問いました。

そこで石井進が参考にしたのが柳田国男による民俗学の方法、考え方です。坂は境であり、そこは内と外、生と死、此岸と彼岸、文化と自然、定着と移動など、ふたつのもの、世界の境界であるということです。石井進は1984年に発表した「坂と境」という論文で、このことを入口として坂について語り出し、この民俗学的アプローチが鎌倉の坂・切通しに当てはまるかどうかを、続けて、検証しています。

巨福呂坂については、「一遍絵図」を取り上げ、布教のために鎌倉の町に入ろうとする一遍とその弟子たちが、時の執権、北条時宗とその部下たちと出会い、追い払われる図を紹介しながら、鎌倉の入口である巨福呂坂の様子について語っています。踊り念仏という形で秩序を破壊する集団の流入を許さない北条時宗の姿に、秩序の象徴である鎌倉の町、その秩序の維持者を見て、内と外、秩序と混乱を分つ境としての機能を坂に認めています。

さらに、巨福呂坂の他、化粧坂、名越坂、極楽寺坂などを取り上げ、坂に隣接した土地が墓地、葬送の地であったことを示しています。このことは、中世考古学の成果を取り入れたものです。ここでは、坂が生と死を分つ場としての境界であることを説明しています。

また、鎌倉の坂、切通しの軍事的機能にもついて着目し、大切岸に代表される切岸、空堀という軍事的施設の存在の他、極楽寺坂や大仏坂、巨福呂坂など主要な坂の入口

周辺はすべて、北条氏の一族の屋敷、土地が占め、防御の機能を担っていたことを論じています。そのことは、文献史料だけではなく、中世考古学の発掘調査結果によっ  
ています。

坂の防御機能に関連して「切通し」に関して、面白い指摘をしています。「鎌倉の境界部の情景として、(略)、防備嚴重で「切る」と「通す」の両様の機能をそなえていた「切通」、さらに、それを防衛する大切岸や多くの切岸・空堀等の存在が、まず注意される」と述べていますが、切通しという単語の意味をそのような機能面もあるという指摘は、これまでの坂学の流れの中では聞いたことがありません。

また、坂名の由来に関連しては、化粧坂の名前の由来を、化粧坂の近くには娼家が多数あり、その遊女の化粧からという伝説と、この近くには刑場があり敵将の首が切られ、その首を化粧したことによるという伝説を紹介しながら、柳田国男が収集した全国に多数存在する化粧坂、化粧池、化粧水などという「化粧」伝説を引き、伝説の中味を検討し、最後に文化人類学者の山口昌男を引用しています。「化粧は人間が移行する状態を徴すことです。成人式においても化粧する例が多いのですが、松浦小夜姫は化粧して死に向かう。生から死へ、陸から水へ移行していく。別の世界へ入っているのです。坂についても、坂を越えるということは、内なる村から外の世界へ入っていくことです。そういう場所に化粧池、化粧坂という名前が残っている訳です。」それを受けて、石井進は「鎌倉における化粧坂は、山口のここで説く以上にあざやかに、境界としての特質・属性を物語る場であったといえるのではあるまいか。」と述べ、坂名の由来そのものを境界論の中で解くアプローチを示しています。

このように石井進は、横関英一と異なる形で、柳田国男の研究をベースに、坂についての考察を深めました。柳田国男の地名論を基本とし、坂名を考察の対象とした横関に対し、石井進は柳田国男の境界論をもとに、境界としての坂という視点を獲得しました。その視点から、鎌倉の坂、切通しを具体的にみて、境界としての坂の姿、役割を検討し、「坂と境」以降も、「都市鎌倉における「地獄」の風景」、「鎌倉に入る道・鎌倉のなかの道」などの論文、「中世のかたち」などの著書で、鎌倉の坂、切通しや街道、主要道など道について多面的に論じて行きました。

歴史学者である石井進が、柳田国男の境界論から坂を見直すことで、日本中世史、鎌倉史の研究に大きな成果をあげたことで、柳田国男の地名論とは異なり、民俗学の中からも柳田国男の境界論を再評価し、坂との関連で考える研究者が出て来ました。東北芸術工科大学教授として東北学を提唱するなど精力的な活動を行っている赤坂憲雄が「境界の発生」で、歴史学者の石井進経由で柳田国男の境界論の掘り下げを行っています。

## 7. 横関英一以来の坂学の流れと石井進以降の歴史学の流れはクロスしていない

石井進により、鎌倉の坂、切通し、さらには道についての研究の視座が示されたことにより、彼に続く鎌倉史、日本中世史の研究者は、鎌倉史研究の対象として鎌倉の坂、切通し、さらには道、鎌倉の地形などを取り上げ、掘り下げています。

例えば、銭洗弁天・宇賀福神社前の急坂は、江戸時代には大坂（あるいは逢坂）と呼ばれていたことを、江戸時代に作成された「扇ヶ谷村絵図」（鎌倉国宝館蔵）に記載されていることから立証しています。（高橋慎一郎（編）『鎌倉の歴史 谷戸めぐりのススメ』）

これに関するエビデンスとしての「扇ヶ谷村絵図」は、鶴岡八幡宮にある鎌倉国宝館に所蔵されるに際し、史料批判が行われ贋作ではないことが確認されたものです。この大坂（逢坂）は、化粧坂の整備との関連で鎌倉時代に、すでにあった可能性は述べられているものの、エビデンスがないため、あくまでも可能性としてのみ語られるのはアカデミズムの研究者らしい態度であると思います。

また、「平家物語」の記述と発掘調査の結果を併せて、釈迦堂切通しの道筋に並行する犬懸坂という失われた坂、道について、その道筋を検証する研究も行われています。（高橋慎一郎 同上）

その他、鎌倉時代、室町時代という日本の中世において、東海道はどのような道筋であったのか、鎌倉にはどのようなルートで入り、出ていったのかについての研究も積み重ねられています。（岡陽一郎「大道 鎌倉時代の幹線道路」他）

鎌倉の坂、切通し、道については、日本中世史の研究者たちにより、大きな成果があがっています。しかし、残念なことに横関英一、石川悌二を祖とする坂学の流れは、これらの成果を取り込むことは出来ていません。横関英一が、エビデンスを重視し、厳密な方法論に基づき、坂学を近代の学問として確立しようとするために、対象を極めて限定したことの影響が残っている結果だと思えます。

石井進の研究は、民俗学の分野では、柳田国男が提起した地名学の流れとは異なるものを生んでいます。赤坂憲雄「境界の発生」は、境界論という分野で、坂を取り上げるといふ新しい流れを生み出しています。坂学、坂研究の分野でも、石井進の研究を受けて、展開していく流れが生じていないということは、学問、研究として未成熟な面があると思わざるを得ません。

## 8. まとめ

坂学、坂研究を考える時、横関英一が近代の学問のひとつのジャンルとして認められるために、厳密な方法論に基づき、エビデンスをしっかりと意識した研究という原点を重視することの大切さを、改めて、認識する必要があると思います。

松本理事長が、切支丹坂の論考や坂研究会のこれまでの報告で示されたこと、あるいは、前回の坂研究会での磯谷さんの報告のように、江戸時代に起源をもつ坂を、近代の地図等の史料を交え、実証的かつ丁寧な掘り下げをすることは、横関英一が目指したことを後継者として、深めることだと思います。この方向での研究の深化は不可欠なものだと思います。

他方、横関英一が近代の学問として坂学を確立するため、断念したもの・対象・方法論というものがあるのは間違いありません。江戸由来の坂、坂名という横関英一が研究対象としたものを越え、しかも同時に、近代の学問として成り立つため明確な方法論とエビデンスを重視するという姿勢をもって、新しい対象を切り拓いて行くことも、坂学の発展のために必要なことだと思います。

こちらは、決して楽な道ではないと思います。しかし、石井進以来の日本中世史の研究成果を取り込むことで、鎌倉の坂、切通しについて研究を深めることは可能だと思います。また、石井進が坂を研究対象とする際、坂名ではなく、坂が果たす役割、機能、さらには坂にまつわるものなどを考察することで、坂についての認識を掘り下げたように、坂の意味を探る方向もあると思います。

また、松本泰生は「東京の階段」で23区内の階段坂に特化することにより、坂名ではなく、階段坂と地形、階段坂と暮らしという方向でも研究の可能性を探っています。さらに、タレントのタモリは「TOKYO 坂道美学入門」で、坂名の研究ということにこだわらず、いい坂の条件を提起しています。タモリは、坂好き、地形好きという面が着目され、NHKの「ブラタモリ」という人気番組に繋がっていますが、タモリが提起したテーマの掘り下げは、まだまだ、十分ではないと思います。

このふたつの方向で、横関英一の影響を受け継ぎ、坂学を掘り下げて行くのが、これからの坂学会の役割ではないかと思います。

## 9. 参考文献

### (A)

- (1) 柳田國男『地名の研究』講談社学術文庫 2015年（原著 1936年）
- (2) 石井進「都市鎌倉における「地獄」の風景」石井進著作集 9巻所収 岩波書店 2005年（初出 1981年）
- (3) 石井進「鎌倉に入る道・鎌倉のなかの道」同上所収（初出 1981年）

- (4) 石井進「坂と境」石井進著作集 10 卷所収 岩波書店 2005 年（初出 1984 年）
- (5) 石井進『中世のかたち』「日本の中世」1 中央公論社 2002 年
- (6) 横関英一『江戸の坂 東京の坂（全）』ちくま学芸文庫 2010 年（原著 正 1970 年、続 1975 年）
- (7) 赤坂憲雄『境界の発生』講談社学術文庫 2002 年（原著 1989 年）
- (8) 野口富士男『私のなかの東京』岩波現代文庫 2007 年（原著 1978 年）
- (9) 五味彦彦・馬淵和雄『中世都市鎌倉の実像と境界』高志書院 2004 年
- (10) 高橋慎一郎（編）『鎌倉の歴史 谷戸めぐりのススメ』高志書院 2017 年
- (11) 岡陽一郎『大道 鎌倉時代の幹線道路』吉川弘文館 2019 年
- (12) 石川悌二『東京の坂道』新人物往来社 1971 年
- (13) 岡崎清起『今昔 東京の坂』日本交通公社出版事業局 1981 年
- (14) 道家剛三郎『東京の坂風情』東京図書出版会 2001 年
- (15) 山野勝『江戸と東京の坂』日本文芸社 2011 年

(B)

- (1) 千葉徳爾『新・地名の研究』古今書院 1994 年
- (2) 谷川健一『日本の地名』岩波新書 1997 年
- (3) 谷川健一『民俗・地名そして日本』同成社 1989 年
- (4) 谷川彰英『「地名」は語る』祥伝社黄金文庫 1998 年
- (5) 谷川彰英『東京江戸 地名の由来を歩く』KK ベストセラーズ 2014 年
- (6) 服部英雄『地名のたのしみ』角川文庫 2003 年（原著 2000 年）
- (7) 筒井功『日本の地名』河出書房新社 2011 年
- (8) 鏡味完二『日本の地名』講談社学術文庫 2021 年（原著 1964 年）
- (9) 松永美吉、日本地名研究所（編）『民俗地名語彙事典』ちくま学芸文庫 2021 年（原著 1994 年）
- (10) 宮田登『民俗学』講談社学術文庫 2019 年（原著 1990 年）
- (11) 近藤富枝『田端文士村』中公文庫 1983 年（原著 1975 年）
- (12) 北区子ども家庭部男女共同参画推進課『田端文士・芸術家村と女たち』ドメス出版 1996 年
- (13) 中村隆英『昭和恐慌と経済政策』講談社学術文庫 1996 年（原著 1967 年）
- (14) 森まゆみ『谷根千のイロハ』亜紀書房 2020 年
- (15) 山口廣（編）『郊外住宅地の系譜』鹿島出版会 1987 年

文責 渡邊一夫